

をより緩慢に巡つて居る事を分光器観測で認めた。之は若し無数の小天體より環が出来て居るとすれば之の事は起る必要性が正確である。蓋し之ら天體の一つ々は其の距離から言へば衛星の速度で主星を巡る必要がある。主星に最も近い微片は速度も一番早いに相異なる。假りに環が連続した物質であるとすれば、此うした観測は本統ではないと考へなければならぬ。

他の多くの天文學者はキーラの観測を繰返して見たが、常に結果は同一であつた。其の上、紗の様な環は部分的に透明であるといふことも観測から證明されてゐる。パリーナードは1889年に遠方にあるヤベトス衛星が主星と環の上を通過して居るのを認めた。ヤベトス衛星は主星の影の中にある間は全く消失したが、此の衛星が紗の様な環の影の中に入り込んで了つた時、普通の明るさより淡く認める事が出来た。環が各々分離した微片の群であるといふ結果は、光度計観測からも求められる。

其れ故に、次の様なクラーク・マクスウェルの結論と一致すると考へられる。即ち“純粹な理學の見地よりすれば、土星の環は（恐らく……渦狀星霧を除けば）諸天體中、最も注目すべき天體である”と。

1929年の始めには、環の幅は極大に達し、其の北側の表面がよく見られた。環は大きく開いて、翌年及び翌々年にも見えた。然し幅は漸次縮少して、1936年には環の縁しか見えなくなつた。1936年以後は、約14年間、吾人は環の南側の表面を見る事になる。次に極大に環が擴がるのは1943年である。赤道の南の方にあつた土星は、だんだん北上して、1943年には双子座に入つて、赤道のずつと北になる筈である。（A. S. P. Leaflet 33, 佐金兒譯）

山本博士の近著 山本一清博士は、今春、東京（日本橋區通三丁目6）偕成社より“天體と宇宙”（價2.50）を出版せられ、又、最近、同社から“星座の話”（價1.80）を出版された。尙、恒星社からノルトン星圖の増補版を、興亞日本社から“海と天文學”を、晃文社（京都）から“星”を、何れも今夏に出版される筈。

天 界 正 誤 表

第252號（昭和17年第6號）	誤	正
索引第1頁右11行目、 〃 第3頁下ヨリ1行目、佐登兒	A. S. P. Leaflet } 何レモ「182, 300」ヲ加ヘル。	
第253號（昭和17年第7號）		
第225頁下ヨリ3行目	來る六月より	來る七月1日より
第254號（昭和17年第8號）		
第274頁10行目	k頃の	k項の